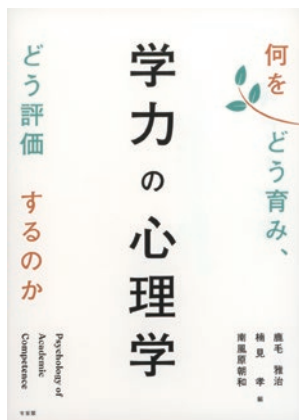


慶應義塾に関連した出版物や教職員の最新著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

「学力」を問い直す、 教育心理学の最前線

『学力の心理学—何をどう育み、どう評価するのか』

鹿毛雅治（教職課程センター教授） ほか編
有斐閣／3190円（2026年7月）



「学力」とは、知識や技能を身に付けることだけなのか？ 本書は、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習への態度・モチベーション、自己調整学習、創造性や非認知能力までを視野に入れ、「学力」を多面的に捉え直す。さらに、授業における評価や大学入学共通テストを例に、何をどう評価すべきかを検討する点も特色だ。教育心理学の第一線で研究を重ねてきた鹿毛雅治教授をはじめ、各分野の専門家が知見を結集。学力を「育むこと」と「測ること」を切り離さず、学校現場における教育実践につなげていく統合的な視座を提示している。

教職員執筆の最新刊

●小崎健次郎（臨床遺伝学センター教授） 著

『医療は「手元のAI」で進化する—診療・研究・教育におけるローカル生成AIのススメ』メディカルサイエンス・インターナショナル／2860円（2026年6月）

●松田隆美（名誉教授） 編著、徳永聡子（文学部教授・池田真弓（理工学部准教授） ほか著

『西洋中世写本を愉しむために—写本・初期印刷本の歴史と鑑賞』白水社／4290円（2026年7月）

●片山杜秀（法学部教授） 著

『大論争 この国の守り方—戦後日本の戦争論』文春新書／1320円（2026年7月）

●清水亮（環境情報学部専任講師） 著

『軍都を歩く—基地と住民の地域生活史』中公新書／1265円（2026年7月）

●佐藤豪竜（総合政策学部専任講師） 著

『働き方の科学—エビデンスが明かす「健康」も「生産性」も手に入れる方法』ダイヤモンド社／1980円（2026年8月）

●廣瀬陽子（総合政策学部教授） 著

『狭間国家の地政学—ロシア近隣国に学ぶ4つの生き残り戦略』東洋経済新報社／2420円（2026年8月）

慶應義塾のこの一冊

『慶應義塾史展示図録 藤山一郎がゆく！—「若き血」から国民栄誉賞まで』

都倉武之（福澤諭吉記念慶應義塾史展示館専門員） 編
慶應義塾大学出版会／1400円（2026年8月）



本書は福澤諭吉記念慶應義塾史展示館における2024年秋季企画展の図録を一般販売としたもの。幼稚園、普通部に学び、歌手・作曲家として昭和の音楽文化を築き、終生慶應義塾と深く関わった藤山一郎（本名・増永丈夫）の歩みを、貴重な写真や楽譜、愛用品とともにたどる。展示の記録にとどまらず、関係者への聞き書きや論考、年譜、作品一覧まで収録。同時に発売された『北澤楽天と近代日本』『慶應義塾と戦争』など他の企画展から生まれた図録本と併せ、さまざまな切り口から塾史に親しむ格好の入り口となるだろう。